

縦と横

前川 良太

昨年度から、支援学校で長年勤めてこられたアトムの子どもの元保護者の方に、職員の研修や保育を深める学びにするために年に数回来てもらっています。先日そのお二人と、子どもの育ちや支援をどう考えるか、じっくり話をしていました。その時の会話の中で「どうしても大人は子どもの育ちを縦に積みたくなる。だけど本当はもっと横に広がるものやでな。」そうおっしゃっていました。まさに、今を迷う私たち親世代にはずっしりと響く言葉でした。育ちに縦と横があるの？皆さんには馴染みのない表現だと思うので少し解説しますね。

「横への発達」という言葉は社会福祉の先駆者、糸賀一雄さんという方が提唱した概念です。縦の発達とは例えば足し算ができたなら引き算ができて、割り算ができたなら分数ができて、のように学力や技術の取得など、階段を上がるように成長していくという側面です。対して横への発達は、目には見えない発達を多方向への広がりとしてとらえることで、他者とのつながりを深めたり、内面の豊かさだったり、直線的に成長していくようなことではない面を表しています。できるかできないか、そんな直線的な育ちだけではなく、その時何を見てどう感じたか、じんわりと横へ広がる育ちにも目を向けるべきではないかという考え方です。

小難しい話をしましたが、これはつばさでの子どもたちの日々とピッタリ重なることです。できるようになることを目指すのではない運動会だってそうです。英語や水泳もない、発表会もない。だけど野山を駆け回り、友達と出会いぶつかり、生活をともにする。だからこそじんわりじんわり横に広く育っていくのです。

今月号のぞう組のページに載っている、子どもたちのインタビューがまさにその集大成です。自分のいいところと良くないところにとどまらず、友達のいいところ悪いところを考え合うって単純にすごいことだなと思います。しかも、私も少しその場にいらしていただきましたが、「悪いところ」と言いながら、責めたり指摘したりするような雰囲気ではないのです。「君ってそういうところあるよね〜」「僕ってそうなんだ〜」ぐらいのもんです。子どもたちにとってはいい悪いですらなく、これは“そのまんまの自分のこともあなたのことも知ってるよ”のメッセージそのものです。自己肯定感＝成功体験や褒められた経験の積み重ね、とよく言われますが、私はそれは不正確だと思っています。それこそまさに縦の視点です。本当は、悪いことも、失敗もそれ自体は指摘されたとしても、あなたはあなたでいいんだと丸ごと受け止めてもらえる実感を感じていくことだと考えています。ノーミスで生きる人なんていません。だけど私は私でいいんだと思えるからこそ、また次に進んでいくのです。まさに横へ広がる育ちや体験が、自己肯定感を育むのです。そんな互いを思い、受け止め合う心が、しっかりとぞう組の子どもたちの中に育っています。それが何よりうれしいことです。

そんな子どもの世界に学ぶべきは私たち大人ではないでしょうか。どうしても私たち大人は、できたかどうか、良いか悪いか、失敗か成功か、そんな風に白と黒の 2 極で考えてしまう癖があります。その一場面を見ていいか悪いか、成果を求める癖があります。

だけど実際の子どもたちの育ちはそんなに単純ではありません。一見すると嫌な体験でも、うまくいかなかったことでも、周りの友達とぶつかり合ったことでも、横へ横へとしっかり子どもたちの根っこを育む栄養となります。こうすればこう育つなんてメソッドに当てはまる子どもは一人もいません。見たり感じたり考えたり、そんな横への広がりがあるからこそ、また縦へ縦へと伸びていくのです。

つばさっ子や日報、懇談会でも、大人から見るとよく映らない文章や話もたくさん聞くとします。だけれどどうか、その一場面だけをみて判断しないでください。子どものことを良し悪しで見ないでください。そこからどんなふうに横へ横へと広がっていくかということをどうか面白がってみてやってください。それが能力や成果ばかりを求められ鈍ってしまった、私たち大人が意識すべきことではないでしょうか。

私たちは幼児期の教育には、この横への広がりは何よりも大切だと考えています。先行して英語が話せても、逆立ちができて、心を置き去りにしては意味がありません。ぞう組の子どもたちも、年が明ければ間もなく小学生です。縦へ縦へと積んでいくような学校での日々をしっかりと支えるのは、幼児期に培った広く太い根っこです。縦へ積むのは後でもできます。けれど今この時期しか体験できないこと、感じられないことこそ、この幼児期に私たち大人が大切に見守っていかないといけないことではないでしょうか。